

書評

萩野善之著：

『見直したい日本の「美」 日本 桜の名所 100 選』

主婦の友社，2009 年，175p. 1400 円

ISBN978-4-07-270194-2

桜は日本人にとって非常に馴染み深いものである。それは歴史的にみると戦争における戦略的意味合いによって私たちの生活に根付いたという見解もできるだろうが，古来より小倉百人一首にも桜が人々の心を魅了していたことを考えると，戦時の戦略的意味合いに関わらず日本人にとって桜はなくてはならないものであったと考えられる。日本の国花にもなっている桜を見ると私たちは春の訪れを感じることができ，桜はまさに日本の春の風物詩である。

本書は，平成 2（1990）年に財団法人日本さくらの会が「日本桜の名所 100 選」として選定した全国の桜の名所を，見直したい日本の「美」というテーマのもと，自然や情景，風景，観光地，施設，建築物，乗り物，食べ物などといった幅広い視点から土地柄や気候毎に各地方を分類する構成が成されており，章立ては以下の通りである。

- 第 1 章 北海道・東北地方
- 第 2 章 関東・甲信越地方
- 第 3 章 北陸・東海地方
- 第 4 章 近畿地方
- 第 5 章 中国・四国地方
- 第 6 章 九州地方・沖縄

まず第 1 章の北海道・東北地方では桜の名所 15 ヲ所が紹介されている。特に，この地域で最も注目していきたいのは，福島県の三春町に存在する通称「三春滝桜」と呼ばれる桜である。こちらは日本の 3 大桜に選定されている桜の 1 つであり，桜の品種はエドヒガン系のベニシダレザクラである。この三春滝桜は，日本 3 大桜の他にも日本の天然記念物としても有名である。天然記念物に指定されている理由として，この桜の樹齢が 1000 年を超える老樹であり，北の寒い気温に晒され，春にとっても雄大な桜の花を咲かせるからである。ベニシダレザクラの特徴は，枝が空に向かって伸びていく一般的なソメイヨシノとは大きく異なり，冬の雪などに耐えるため，枝が下の方向に向かって垂れて伸びていくところにある。樹齢 1000 年のこのベニシダレザクラが「三春滝桜」と呼ばれている理由は，満開時に四方に伸びた枝に薄紅色の小さな花を無数に咲かせ，飛沫が周囲に飛び散る姿がまるで滝のようであるところからである。こちらの桜の樹齢が 1000 年を超えている一方，日本全国に咲き誇る，私たちが一般的に桜と認識している「ソメイヨシノ」は樹齢が数十年とされる。もともと，桜は樹齢が長い樹木であるが，ソメイヨシノの樹齢が若いのは，ソメイヨシノが品種改良によって観賞用に人工的に生み出されたクローン桜であるからとされる。クローン桜のソメイヨシノは，春になって花が咲いたとしても，細胞のクローンである花が実を結ぶことはほぼない。そのため種による子孫を残すという方法は非常に難しく，現在日本全国で咲き誇る日本の桜のソメイヨシノは全て挿し木という手法によって植えられたソメイヨシノのクローンである。挿し木は，種の段階から育てる植樹方法とは異なり，

オリジナルの木の若い枝状から成る幹を切り取り、そこから成長をさせていくものである。

第2章では、関東・甲信越地方について触れられており、この地方での桜の名所は全国でも最多の27ヵ所である。この地域で特に有名な名所は、新潟県の上越市にある高田公園である。この高田公園は、日本三大夜桜にも認定される公園として知られる。この高田公園で見ることでできる桜の品種は、日本全国で最もよくみられるソメイヨシノという桜である。高田公園の桜の始まりは、明治42（1909）年の陸軍第13師団設置を記念して在郷軍社会が2200本の桜が植えられたことと記録される。先に述べたように、ソメイヨシノはいずれもクローン桜であるため、自然種の桜と比較するととても早く死んでしまう。そのため、この高田公園のソメイヨシノも毎年市やNPO団体の管理により補植され今もその美しさが今に引き継がれる。今では、元々2200本ほどあった桜の本数も、植樹本数が4000本を超えるなど全国的に見ても多くの桜をこの高田公園では見ることが可能である。

第3章では、北陸・東海地方について書かれており、この地方の桜の名所は16ヵ所ある。この地方には、3大桜の1つに認定されている桜が存在しており、それは岐阜県本巣市にある淡墨公園である。こちらの淡墨公園では、「淡墨桜」があり、こちらが桜の名木中の名木として桜の研究者のみならず一般的に知られる。この「淡墨桜」の品種は、自然種のエドヒガンとなっており、推定樹齢は1500年、幹回り9.9m、枝張り東西27m、南北20mの巨木である。この淡墨公園はその名の通り、淡墨桜のために整備された公園とされる。また、この淡墨桜の樹齢が1500年というのは今から1500年前に継体天皇によってお手植えされたとする記録からによる。継体天皇もこの淡墨桜のことを『身の代と遺す桜は薄住よ 千代に其の名を栄盛へ止むる』と歌に残すほど愛した淡墨桜であるが、この淡墨桜には他の桜にはほとんど見られない桜の花の色が3度にわたり変化していくという特性がある。つぼみの時は花は薄いピンク色、満開時には白色、散り際には淡い墨色になる。淡墨桜が樹齢1500年の巨木であるという理由の他に、この桜の花の色が変化するというのも人々を古来から魅了し続けた所以であると考えられる。

第4章では、近畿地方についてであり、近畿地方は18ヵ所の桜の名所が存在する。この近畿地方からは、北海道から東海地方ではそれほど見られなかった城を拠点とした桜の名所が存在する。近畿地方の桜の名所のうち2ヵ所は城を拠点としたものであり、それは大阪城公園と姫路城である。ここでは兵庫県の姫路城を主として触れて考察を行う。姫路城はそれ自体が、日本だけでなく世界にとって重要な場所になっていることはいうまでもない。大天守・東小天守・西小天守・乾小天守・4つの渡櫓が国宝に、水の二間など74棟が国の重要文化財に、平成5（1993）年には姫路城が世界遺産に登録されるなど、姫路城の重要性は日本の城の中でも特に際立つものである。この姫路城にも桜が植えられており、日本のみならず世界中の人々が世界遺産の姫路城とともに花見に来る桜の名所として有名である。姫路城に植えられている桜の品種はソメイヨシノ・ヤマザクラ・シダレザクラといった3種類の桜が1000本ほど存在している。この姫路城は夜にライトアップされるが、春になると桜もライトアップされ、城の天守閣と夜桜とがとても優美な情景を作り出している。

第5章では、中国・四国地方について触れられており、桜の名所は14ヵ所ある。この中国・四国地方では、全国的に見ても非常に多くのソメイヨシノを見ることができ、いずれの地方でもこのソメイヨシノを主軸とした名所の紹介が展開される。この瀬戸内海に面した地域だけで見ることでできる桜の情景という観点で考えると、瀬戸内海に面した海、本州の山とのコントラストに桜が映える広島県の尾道にある千光寺公園が中国地方独特の桜の名所の1つであるといえる。桜は親となる10種類の自然種から交配種・品種改良されたものも含め400種類のいずれの桜もほぼ全て塩害に非常に弱く、海辺の近くでの生育を拒む樹木である。瀬戸内海に面した尾道では、海辺の近くにありつつも千光寺のある山や市

街地の桜土手を中心に約 5000 本といった全国トップクラスの数の桜を楽しむことができる。この 5000 本を超える桜以外に尾道では樹齢 900 年の大楠などもみることができる。海辺の近くでありつつも、こうした 5000 本もの桜や樹木が咲き誇るのは、この瀬戸内海に面した尾道や岡山などが一年を通して桜の被害となる台風や雪などの自然災害を四国の高い山々のおかげで受けることがなく、比較的温厚な気候が多いことが樹木の生長に適しているからである。

第 6 章では、日本の南に位置する九州地方・沖縄が書かれており、桜の名所が 10 ヶ所ある。この地方での桜の特徴は、何と言ってもその開花時期の早さであり、沖縄・九州は全国的に見ても非常に早い時期に桜が開花する。その背景として平均気温の高さが挙げられる。ここでは、日本で一番早く開花する桜の名所を見ていく。日本で一番早く開花する名所は、名護城公園にあるカンヒザクラという桜である。カンヒザクラは、普段ソメイヨシノを見慣れている私たちからするとやや桜のイメージから遠い桜となっており、カンヒザクラの桜の花は花の中心が濃い紅色、花の先端が濃いピンク色である。遠目からみて赤い紅色を全体に見ることができる特徴がこのカンヒザクラである。またこのカンヒザクラは元々この地域に自生していたものではなく、植樹者が不明の外来種となっており、今では日本で一番早く開花する桜の名所として整備され有名な場所である。

以上が本書に記載されている主な内容である。

本書では、日本全国の名所 100 選における品種名、桜の見頃、名所までのアクセス方法が記載されている。また、各名所に初めて桜の名所を訪れる人のために、その桜の観光名所の場所や名所の案内所の連絡先といった情報なども丁寧に記載されており、桜の名所についてどのようなものがあるのかを本書を読んで知り、足を運ぶことで目で見てその桜を体感するといったプロセスが想定された作りがなされている。またこれら土地柄を実際に目で確認するために、名所毎の記録写真が 1 枚から 4 枚ほど掲載されており、本書全体での写真の掲載数は 274 枚あり平均で約 3 枚ほどになる。これは、他の桜の名所に関しての本と比較すると、他の名所を記載したものが 190 枚から 260 枚ほどの掲載数であり、本書では桜の名所に関して単に桜の名所の写真のみならず、その土地に根差したものも多く掲載されていることがよく分かる。なお、本書では桜の名所について 2 頁にわたり紹介がなれているものと、1 頁で紹介がされているものがあり、2 頁構成を取るものが 63 ヶ所、1 頁構成を取るものが 37 ヶ所である。これは名所毎の規模が異なること、桜の名所の数が多い地方では一部が共通の地域性を持つものをまとめていることなどから、紹介を 1 頁にするなどの工夫があると考えられる。

地方別の掲載数をみると、北海道・東北地方が 15 ヶ所、関東・甲信越地方が 27 ヶ所、北陸・東海地方が 16 ヶ所、近畿地方が 18 ヶ所、中国・四国地方が 14 ヶ所、九州地方・沖縄が 10 ヶ所と、北に向かうほど桜の名所と認定される場所が多く、南に向かうほど桜の名所は少なくなってくるということがデータとして分かる。さらに本書では、桜の品種などや桜の花の輪郭の大きさについてもコラムで紹介されており、桜の名所や桜そのものを知る一冊になっている。その他にも桜の 3 大桜や 5 大桜として分類ができることも紹介しており、桜について初めて知る人に対しても、桜の中で名木として知られるものにどのようなものがあるのかを教えてくれる。

本書は桜の名所を非常に多くの写真から知ることができ、桜についての知識も教えてくれる玄人から素人まで非常に幅広くサポートしている本であることが分かる。桜の美しさにおける研究を行うには、こうした桜の実際の写真や土地環境、地域の人々の結びつきから桜と人間社会、自然との働きかけなどを多角的に考察することが必要であり、その点において本書は桜を研究する者にとって大変学術的要素を持つ書物であると考えられる。

(半田)